

好きな本の見つけ方

2021.2.12

文は人なり、というらしい。祖国は国語だ、と言った人もいた。

あまり知られていないが、欧州最大の書店は、イタリアのミラノにある。場所は、ミラノ中央駅の中である。

ミラノは内陸にあって、海がない。港がない町の玄関は、鉄道の駅ではないか。ミラノはその玄関口に、書店を置いたのである。

旅に出るため駅に着くと、プラットフォームに出る前に、この書店がある。

「私を連れて行って」

どの本も、人待ち顔で書棚に並んでいる。

ミラノに着く人を本が迎えて、発つ人を本が見送る。それは、なかなかの心づくしである。

あるとき、小学校の国語の授業を見学する機会を得た。初めての授業である。入学したばかりの六歳たちは、緊張してじっと教師の顔を見ている。教師も子供たちの顔を見つめ返す。

教科書を開くのかというとそうでなく、

「さあ立って」

教師は一年生たちを促した。教室から出て、廊下を歩き、奥の部屋へと入った。

床張りのその部屋は、天井までの大きな窓が並び、そこから薄く緑に染まった木漏れ日が室内に差し込む、居心地のよい場所だった。

壁には低い本棚があり、絵本から古典文学までが並んでいる。

国語の第一回目の授業は、図書館へ行くこと、だった。

教師は、六歳の子供たちに言う。

「どのようにして本を選ぶのでしょうか」

表紙の絵、という子あり。題名だ、いやアニメ映画になったもの、と口々に子供たちは応えた。

教師は笑って皆の声を聞き、そしてそばにあった一冊の本を取り、顔の前へ持ち上げて開いて、目を閉じた。

開いた本の中に顔を埋めるようにして、

「本の匂いを嗅いでごらんさい。好きな本は、いい匂いがするものよ」

そう言って、本の中で教師は大きく息を吸い込んだ。

日本でも、こんな素敵な授業があるのだろうか。イタリアの人のセンスなのだろうか。

これは、『イタリアの引き出し』という本で、内田洋子さんという方が書いたものである。我が家が誇るイタリア関係蔵書の珠玉の1冊である。内田さんはイタリア在住のエッセイストである。東京外国語大学イタリア語学科を卒業している。イタリアで出会った人々の人生の陰影を鮮やかに描き出し、高い評価を得ている。

この方の文章は、こんな感じで、ぴったり当てはまる言葉は見つからないのだが、とても心地よい。この本には、このような短い文章が、60も入っている。内田さんの“引き出し”はすごい。イタリアへのイタリア人への「見方、考え方、受けとめ方」が秀逸である。